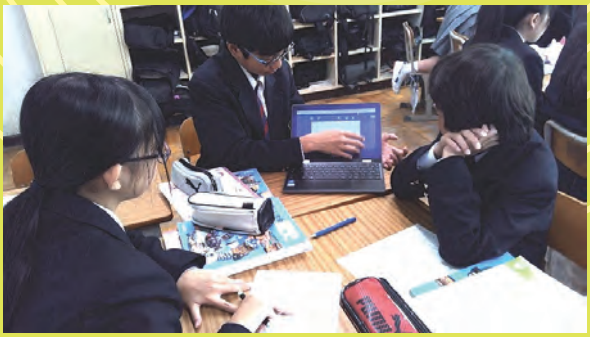
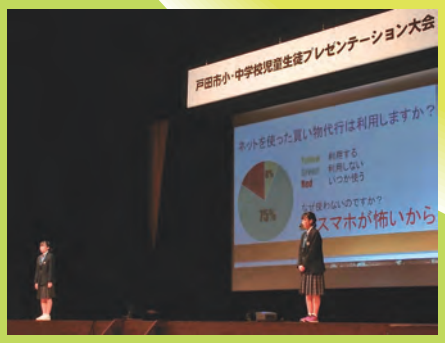
やさしいまちに、なりたい。

令和2年度

指導の重点・主な施策

とだっ子 やり抜く力で 未来に夢を





戸田市教育委員会

戸田市教育委員会 facebook

指導の重点・主な施策について

新学習指導要領が今年度から小学校で全面実施となった。中学校においては令和３年度に全面実施となる。これまでも育成を目指してきた「生きる力」をより具体化し、これからの時代に求められる子供たちが身に付けるべき資質・能力が「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱で再整理された。こうした資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」の視点からの授業改善をさらに充実させていくことが重要である。

戸田市教育委員会では、「戸田市の教育振興に関する大綱」（平成２８年４月策定）及び「第３次戸田市教育振興計画」（平成２８～令和２年度）を基盤に、国や県の動向や各学校の実態を踏まえ、新学習指導要領への移行が確実かつ円滑に実施できるようにするとともに、これからの変化の激しい時代を生き抜くための力を子供たちに身に付けられるよう、各施策を実施する。

この「指導の重点・主な施策」は、各学校で行う教育活動の指針を編集したものである。各学校においては、自校の実態に即して本冊子を十分に活用し、令和２年度の指導の重点を明確にし、学校教育の充実を図られたい。

第３次戸田市教育振興計画

基本理念：生き生きと　共に育む　教育のまち　戸田

キャッチフレーズ：とだっ子　やり抜く力で　未来に夢を

基本目標１：やり抜く力を育む教育を推進する～確かな学力と生徒指導の充実を図る～

１確かな学力の育成　２豊かな心の育成　３健やかな体の育成　４国際社会で活躍できる人材の育成

基本目標2：よりよい教育環境を整備する～産官学民及び家庭・地域と連携し、知のリソースの活用を図る～

１新しい学びの創造　２教員の資質向上・支援　３学校施設・設備の充実　４特別支援教育の充実

目指す児童生徒「とだっ子」像

希望をもち、思いやり、未来を拓くため　最後までやり抜く児童生徒

■令和2年度　戸田市立小・中学校における標準授業時数について

〈小学校〉

	各教科									特別の教科である道徳	外国語（英語）活動	外国語（英語）	総合的な学習の時間	特別活動	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育						
第１学年	306	＊	136	＊	102	68	68	＊	102	34	＊	＊	＊	34	850
第２学年	315	＊	175	＊	105	70	70	＊	105	35	＊	＊	＊	35	910
第３学年	245	70	175	90	＊	60	60	＊	105	35	70	＊	35	35	980
第４学年	245	90	175	105	＊	60	60	＊	105	35	70	＊	35	35	1015
第５学年	175	100	175	105	＊	50	50	60	90	35	＊	70	70	35	1015
第６学年	175	105	175	105	＊	50	50	55	90	35	＊	70	70	35	1015

〈中学校〉

	各教科									特別の教科である道徳	総合的な学習の時間	特別活動	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	外国語（英語）				
第１学年	140	105	140	105	45	45	105	70	140	35	50	35	1015
第２学年	140	105	105	140	35	35	105	70	140	35	70	35	1015
第３学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	70	35	1015

※小学校中学年における外国語（英語）活動の実施について

本市全小学校は、中学年の「総合的な学習の時間」を３５時間削減し、外国語（英語）活動を３５時間実施することが可能となっている。これは、学習指導要領等の教育課程の基準によらない特別の教育課程の編成・実施を可能とする特例校（教育課程特例校）（令和２年１月２２日　文部科学大臣承認）となっていることに基づくものである（期間は、次期教育課程変更日まで）。

※小学校新学習指導要領における外国語（英語）活動及び外国語（英語）科への短時間学習の導入について

本市の中学年の外国語（英語）活動については、平成１５年度から３５時間実施しているが、さらなる英語教育の充実を図るために３５時間増とし、合計７０時間とする。中学年、高学年の３５時間分の実施方法については、１５分間の短時間学習を３回行うことにより１単位時間（４５分間）に換算することとする。

なお、低学年については、余剰時間や短時間学習も含め２０時間程度とする。

アクティブ・ラーニング指導用ルーブリック 2020

アクティブ・ラーニングの視点から、**不断の授業改善**を図るため、授業を自己・他者評価する際の基本的な５つの視点を**指導用ルーブリック**として示した。

視点１と視点５は、目指すべき目標と学びの評価であり、これらは**授業の根幹**と捉える。

1 児童生徒が目標を理解し、課題に興味をもって取り組んでいたか。
【目指すべき目標・評価規準の設定等】

□指導計画に基づき、適切な目標（資質・能力の三つの柱に基づき「何ができるようになるか」）が設定できたか。
□本時の目標が達成できているかを評価できる評価規準が設定できたか。
□児童生徒の学習意欲を高められる導入場面であったか。（学習問題や課題の工夫、提示方法の工夫など）

2 児童生徒が自分の考えを表現することができていたか。
【主に主体的な学びの視点】

□本時の課題を正しく伝え、見通しをもたせることができたか。（※１）
□自分の考えを表現することができるように、（主につまずいている児童生徒たちへの）支援方法を準備し、実行することができたか。
□自分の考えを表現することができるように、適切な時間や場の設定・ワークシート等の準備ができたか。
□学習活動は、目標の達成につながっていたか。

3 児童生徒が友達の発言を受け止め、自分の意見と比べていたか。
【主に対話的な学びの視点】

□児童生徒の考えを広げ深められるような、学習形態（個人、ペア、グループ、全体）は設定できたか。
□児童生徒の考えを広げ深められるよう、教具（タブレットＰＣ・ワークシート・具体物等）を工夫し用いていたか。
□目標の達成につながるように児童生徒の考えを可視化（板書、ＩＣＴ等を使って示すこと）できたか。（※２）

4 児童生徒が思考・判断・表現する活動を通して「見方・考え方」を働かせていたか。
【主に深い学びの視点】

□児童生徒が本時に働かせるべき「見方・考え方」は、明確であったか。
□児童生徒が「見方・考え方」を働かせることができる学習活動を設定することはできたか。
□児童生徒が働かせていた「見方・考え方」を可視化する（板書・口頭等）ことはできたか。

5 児童生徒が「分かったこと」「やったこと」や「できたこと」など、学びの成果や課題を実感していたか。
【学びの評価・振り返り】

□評価規準・評価計画に基づき、本時の児童生徒の学習状況を捉え、個々・グループ等へ支援する（キャッチ＆レスポンスする）ことができたか。
□評価するための方法や場面を設定することができたか。
□児童生徒が本時の学習を振り返ることができる場面が設定できたか。（※３）

※１～３は、令和元年度達成率が低かった事項である。※１と※３は授業の根幹であるため、見通しと振り返りの時間を必ず設定することが不可欠である。※２は児童生徒が、自分の考えをもって話した結果をアウトプットし、考えを再構築することで深い学びにつなげる手立てである。

Ｒ０１達成率	※１　小88%、中67%	※２　小54%、中34%	※３　小63%、中44%
Ｒ０２目標値	※１　小中ともに90%	※２　小中ともに60%	※３　小中ともに70%

Ｒ０１達成率の数値は、学校訪問で先生が自分の授業を評価したものである。

指導用ルーブリックに基づく授業づくりのポイントについて
～エビデンスに基づくグッドプラクティスの紹介～

本年度も、埼玉県学力・学習状況調査の結果及び指導用ルーブリックを活用して、児童生徒の学力を特に伸ばしている教師（小学校21名、中学校10名）へのインタビューを行った。質問事項としては、主に『①児童生徒の学力を伸ばすために意識していることは何か』と『②支援を必要としている児童生徒への対応について』である。以下は、インタビューの内容をまとめた、エビデンスに基づく、効果的な指導方法（グッドプラクティス）である。

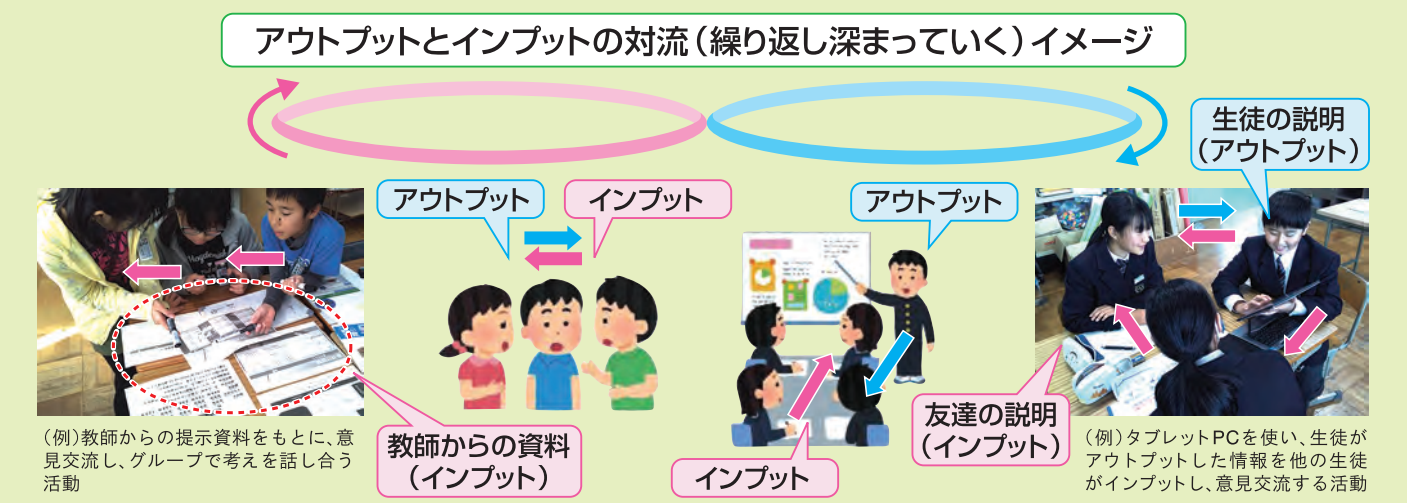
◆児童生徒の学力の伸ばし方～エビデンスに基づくグッドプラクティス～

1 Output（アウトプット）とInput（インプット）の対流が生まれる授業づくり

主にルーブリック2～4に関わって

授業の目標に近づくアウトプットを誘発するインプット

- 期待するアウトプット（目標に近づく学びの姿）を見通し、意図的・計画的な教材・資料を提示する。
- 絵や図、表などからインプットすることが得意な児童生徒もいれば、言葉（文章）からインプットすることが得意な児童生徒もいる（両方必要な児童生徒もいる）。インプットしやすい特性が違うので、個々の学習状況を教師は丁寧に把握していく。
- 漠然と「何で？」「理由は？」と投げかけるだけではなく、何をどのように考えればよいかを焦点化し、児童生徒たち同士の「インプットとアウトプットの対流」をコーディネートする。



アウトプットの焦点化①～思考を可視化させる発問～

アウトプットの目的	アウトプットさせるための教師の発問（例）	アウトプットされた児童生徒の考え
手段・方法を問う（HOW）	・どのようにして、～すればよいか説明しましょう。 ・どんな方法を使って調べればよいか、絵や図で説明しましょう。	（例）～を用いて、…する。
理由を問う（WHY）	・どうして～なのか、説明しましょう。 ・～のように考えた（書いた）理由を書きましょう。	（例）～だから、…である。

アウトプットの焦点化②～「考えるための技法」の指導～

技法（例）	主な思考ツール		声かけの例
比較する	●マトリクス	●座標軸	～と…を比べると…　～の同じ（異なる）所は
分類する	●ベン図	●くま手チャート	同じ仲間に分けましょう。（まとめると…）
関連付ける	●イメージマップ	●クラゲチャート	今までに習ったことと同じところは…

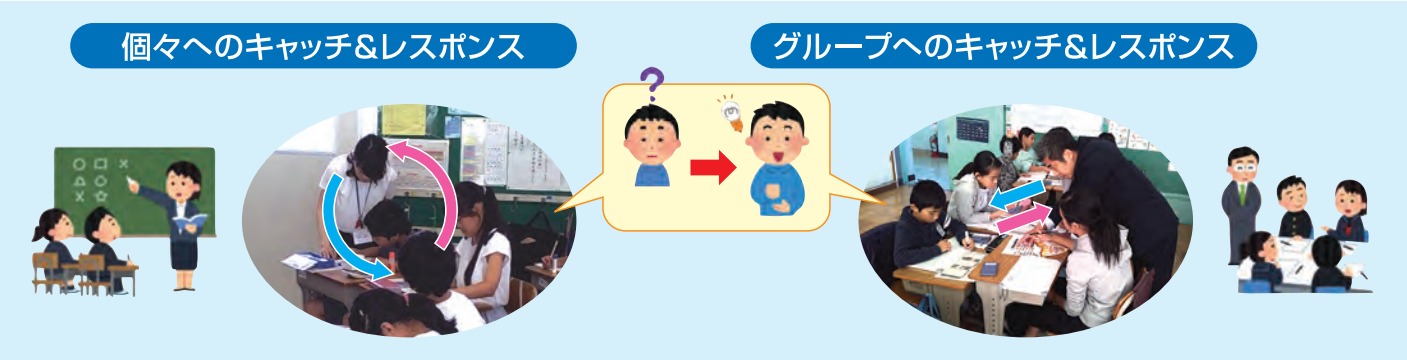
※考えるための方法：小学校学習指導要領解説　総合的な学習の時間（p 84、85）参照

② Catch（キャッチ）& Response（レスポンス）による授業づくり

主にルーブリック１＆５に関わって

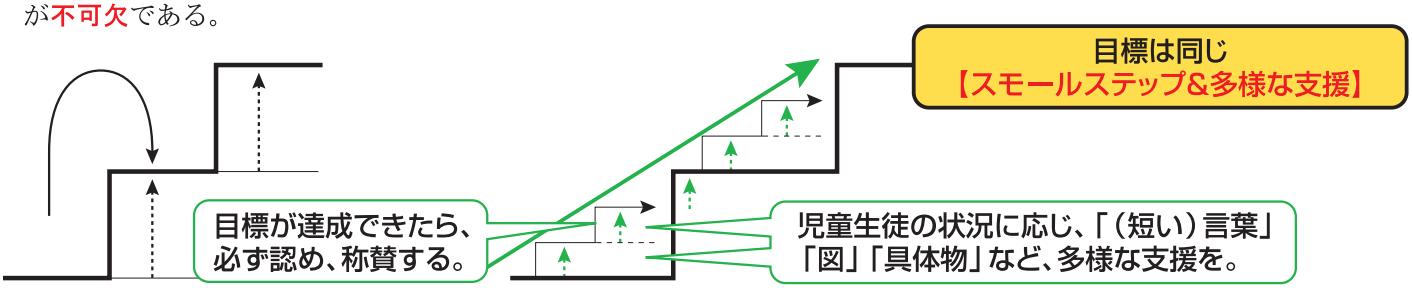
Catch（キャッチ）& Response（レスポンス）による指導と評価の一体化

・目標に即し、子供たちの学習状況を捉え（キャッチ）、個々・グループ等への机間指導における声かけ（レスポンス）を充実させていく。
・目標の達成状況を把握するため、授業の途中で学習状況を評価したり、授業の終末に評価問題に取り組ませる場面を設定したりする。
・評価内容・方法、タイミングは授業前に設定する。Ｂ規準に達していない児童生徒には、単元を通じて必ず支援していく。（一人一人に寄り添った指導）



③ 実態に応じたきめ細かな授業づくり【スモールステップ＆多様な支援】

・児童生徒たちの学力を特に伸ばした教師は、支援が必要な子供たちに対して、事前にニーズに合った支援を準備したり、必要に応じて個に応じて支援したりしていく。
・一人一人の学力を伸ばしていくためには、現状の学力や学習の状況を受け止め、その子に寄り添い指導していくことが不可欠である。



・【柔軟な対応】…個々の学力の実態、学習状況等に応じて、課題を変えたり、支援方法を変えたりしながら、全員が目標を達成できるよう導く。
・【視　覚　化】…教師の口頭のみの説明だけでは理解するのが難しい児童生徒もいるため、大切なことは、「口頭」＋「板書」で説明していく。また、文字だけでは理解しづらい子がいる場合には、絵や図（ときには具体物）なども取り入れて説明するよう心掛ける。

④ 非認知能力の育成

・各学校の非認知能力育成プログラムに基づいて、一人一人が安心して学ぶことができるクラスづくりを日々心掛ける。

●プロセス（過程）を称賛

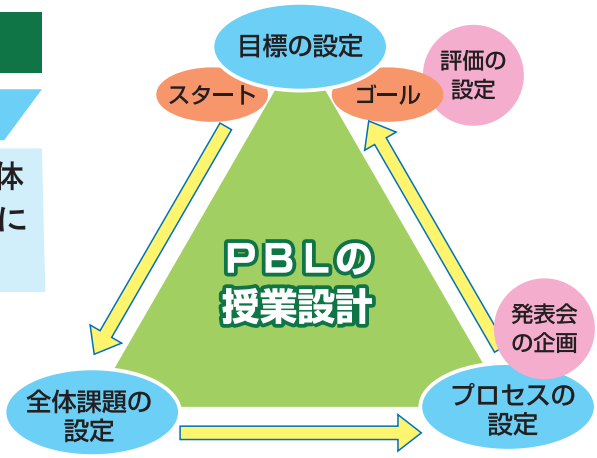
できたところやできるようになったところを先に伝え、それまでの過程を褒め、自己有用感の向上につなげていく。できないことがあることは当たり前であるという考えの下、課題克服のための方法を一緒に考えていく。

●努力している過程の可視化

○○カードや学習シールなどを使って、目標達成までの過程を視覚化し、どのくらい努力をすれば、自分はどのくらいのことが達成できるのか自分の力を知ることにつなげていく。

戸田型ＰＢＬ（プロジェクト型学習）の考え方２

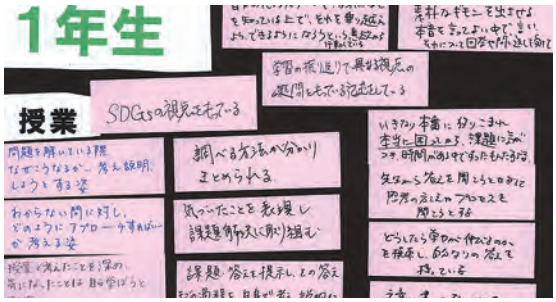
ＰＢＬの授業設計



目標の設定

児童生徒の実態やアンケート等をもとに、プロジェクト全体を通じて、子供にどのような力を身に付けたいかを明確にする。　【例】KJ法等

子供に身に付けたい力を十分に検討し、設定する



身に付けたい力をＫＪ法で列挙

評価の設定

目標と指導と評価を結び付ける。目標ー指導ー評価

目標に準拠した評価や評価に基づいた指導について検討する。目標と指導、評価が一体化するように設定していく。【例】**目標➡**戸田市のごみの減量化目標に対して、自分たちでできることを考え、家庭や地域に発信していくことを通して問題意識と目的をもって課題を追究する力を育てる。**評価➡**戸田市のごみ問題について考えをもち、見通しをもって情報を収集したり、取捨選択したりして、自分なりの解決方法をもつ。

プロセスの設定

①課題の設定
児童生徒が課題を自分ごととして捉えられるようにすること

②情報の収集
児童生徒が常に目標を意識して情報を収集できるようにすること

③整理・分析
収集した情報から児童生徒が自分の考えをもつことができるようにすること

④まとめ・表現
他者からの視点により、自分の考えた案をブラッシュアップしたり、新たな課題を見つけ出すことができるようにすること。
これからの学習や生活に生かすために振り返るようにすること。

②情報の収集　③整理・分析　④まとめ・表現を繰り返すことがポイント

発表会の企画

活動の成果をアウトプットする方法は多様であるが、子供たちが相手意識、目的意識をもって活動を意欲的に続けられることが重要。成果物を作成することだけが発表とは限らない。

【発表会の企画例】
プレゼンテーションのポイント（プレゼンテーション大会上位入賞校の担当教諭　児童生徒の聞き取り調査より）
・児童生徒自身の体験活動を大切にすること。　・児童生徒に考えさせる声かけをすること。
・フィードバックの回数を確保すること。
〈キーワード〉自分でできる解決法、自律した学習者の育成

平成31年度
ＰＢＬ関連資料

全体課題の設定（プロジェクト名：身の回りの課題を自分たちで解決しよう）

★ポイント
①身近に存在する課題
②児童生徒が貢献できる課題
③答えがすぐに見えない課題

★キーワード
①自分ごと　課題意識
②貢献意欲　他者意識
③好 奇 心　創 造 性

実生活
実社会へ
つながり

学びの深まりがレベルアップ

実生活の課題解決の追究（児童生徒の活動）

身近に存在する問題点をみつける

①導入
自分たちの生活を振り返り、学校生活にはどのような問題点があるのか調べた。

②情報収集・整理・分析
アンケートを取って、現状を把握することにした。アンケートを整理した結果、「トイレが汚い」という問題点が多かった。

③まとめ・表現
「トイレが汚い」ことを解決すること、理由をデータを示して先生や友達に発表した。

問題点の原因を探る

④課題設定
「トイレが汚い」という学校の問題点を解決するために「どうしたらよいのか」という課題を設定した。

⑤情報収集
トイレが汚れる原因を調べてみた。

⑥整理・分析
トイレの清掃の様子と汚れる原因を分析した。

⑦まとめ・表現
利用者の使い方がよくないと結論づけ、クラスで発表した。

解決策を実行する

⑧課題設定
「トイレをきれいに使ってもらうためにはどうしたらよいか」という課題を改めて設定した。

⑨情報収集
汚れる場所や日時、汚れの種類や利用者の行動等を調べた。
★清掃業者の人に話を聞く

⑩整理・分析
汚れの原因を整理し、利用者の足を置く位置が原因だと分析した。

⑪まとめ・表現
和式トイレの足を置く位置に目印となるマークを設置した。

実社会の課題解決の追究へ

⑫振り返り
目印となるマークを設置した結果がどうだったかを振り返った。

⑬課題の設定
学校の課題から地域に視点を広げ、公園のトイレをきれいに使ってもらうためにはどうしたらよいかという課題を設定した。
★みどり公園課の人に話を聞く

教師の役割と児童生徒への声かけ（例）

導　入　①

●自分ごととしてとらえられるよう、十分な情報を与えるとともに魅力的な導入場面を設定する。
・学校生活の中で、みんなが困っていることは何かな？
・〇〇さんが困っていることは何だろう？

情報収集　整理・分析②⑤⑥⑨⑩

●児童生徒に見通しを持たせるための作業時間数を伝える。
●進捗状況を確認する。
●どのようにすれば、学びが深まるか声かけをする。
・優先して取り組まないといけないことは？
・もっと必要な情報は？
・逆の立場なら？
・その解決策は他の人もできる？

まとめ・表現③⑦⑪

●発表する時間を設定する。
●発表する方法を設定したり、児童生徒に考えさせたりする。
●ブラッシュアップさせる声かけをする。
・～さんからの意見を聞いて、どう思った？
・～さんの質問からやらなければいけないことは？
・次はどうしたらいいかな？
・相手に一番伝えたいことは何かな？
・この構成で聴いている人は、わかるかな？

課題設定④⑧⑬

●課題を見つけられるような時と場を設定する。
（必ずしも外にでなくてもよい）
・問題だと感じたことは？
・どうしたら解決できそうかな？

振り返り⑫

●児童生徒に学びの変容を感じさせることができるようにする。
・この学習（今日の学習）で自分ができるようになったことは？
・この学習（今日の学習）で自分の考えで変わったところは？

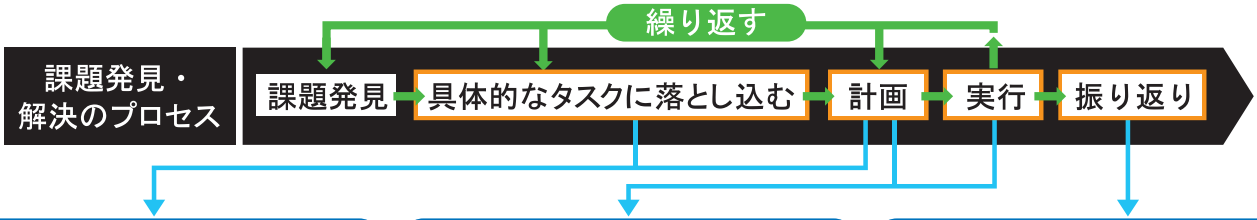
児童生徒の学びが育っていくための形成的評価

●身に付けさせたい資質・能力や本時のねらい、ルーブリックに応じたキャッチ＆レスポンスをしっかりと行う。
●本時の活動をどのように見取り、評価するのか、どのような学びにつなげていくのかを考えながら、机間指導を行う。
・このアンケートを取ることで、何がわかるの？
・この資料からわかるのはこれだけかな？
・自分たちの力でやってごらん。困ったときにはヒントをあげるよ。

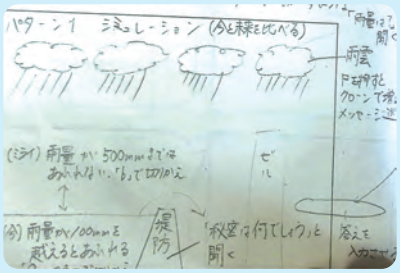
プログラミング教育の特性を生かした授業づくりを

◆課題発見・解決のプロセスを繰り返す

プログラミング教育の授業では、児童生徒が自分の「意図（課題）」を実現するために、解決方法の見通しを立て、試行錯誤を繰り返しながら学びを深めていく、という特性がある。このことから、下図のような課題発見・解決のプロセスにおいて、汎用的な資質・能力の育成を進めていく。



「書く」活動で見通しを

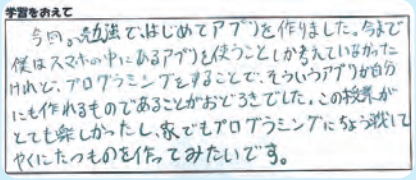


手順書や絵コンテなど、はじめに紙に書く活動を位置づけることで、児童生徒がプログラミングの「意図」を明確にし、活動の「見通し」をもつことができる。さらに、プログラムを修正する際には「試行錯誤の可視化」を行うことにもつなげることができる。

STEAM・PBL のツールとして

プログラミングの学びはＰＢＬと親和性が高い。画像は「下級生を笑顔にしたい」という課題解決のため、未来のおもちゃづくりを行っている場面である。課題解決方法の一つとしてプログラミングを取り入れることでＳＴＥＡＭの視点からＰＢＬの実現につなげることができる。

学びを実感できるように



単元を通して、プログラムの作成に終始せず、試行錯誤やプログラミングを生活に生かそうとする態度などに重点を置く授業づくりも必要である。答えが決まっている予定調和の学びから脱却し、児童生徒が学びの成果を自らの言葉で表現できるような振り返りを目指す。

まずはここから

授業デザイン

H31指導の重点・主な施策より

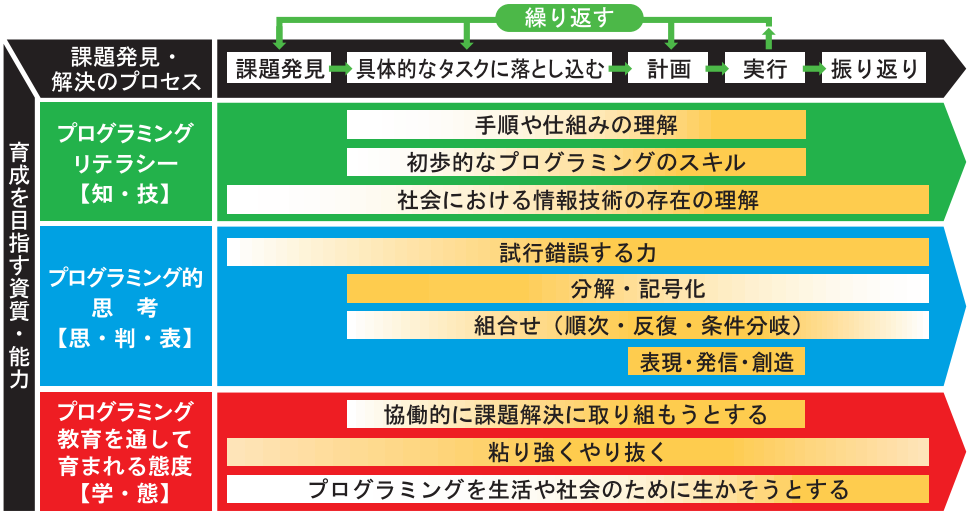
参考資料

市全校共有フォルダ共有資料

- 戸田市版プログラミング教育で育成を目指す資質・能力
- 市カリキュラム用テキスト及び指導略案集
- 各教科等における実践事例・指導案付き
- 参考動画（小６理科 micro;bit・戸田南小研究発表授業）
- ＩＣＴリテラシー育成体系表（戸田第一小研究発表資料）
- 教育センター貸出用教材一覧

放送大学 中川一史 教授　監修のもと、プログラミング・ＩＣＴ教育研究推進委員会では、『戸田市版プログラミング教育で育成を目指す資質・能力』を作成している。

右図は、「課題発見・解決のプロセス」において、これらの資質・能力がどの場面で発揮されるのかを、各学校の実践をもとに分析・可視化したものである。色が濃いところほど、各項目が発揮されうる傾向が高いことを示している。授業づくりにおいてはこのことも念頭に置きたい。



◆その他にこのような特性も

- 結果のフィードバックが即時的であり、試行錯誤（トライ＆エラー）を前提にした学びになる。
- 既に存在しているテクノロジーの模型が作成でき、その仕組みの理解を深めやすい。
- 現実の課題解決につながるアイデアのプロトタイプ（試作型）を作ることができる。
- 児童生徒の興味・関心が高く、教師の予想を超える取組を行う児童生徒が多く出現する。

ＩＣＴの利活用　学びの可視化

ICTを活用し、児童生徒の学びの状況やプロセスを的確に把握（キャッチ）し、迅速・適切にフィードバック（レスポンス）することで、教師が「～させる」学びから、児童生徒が「～する」学びを目指す。

◆ＩＣＴで効果的、効率的に キャッチ＆レスポンス したい 3 場面

1 状況把握

同時に多くの児童生徒の学習状況を把握できます。一人一人の意見や活動につまずく児童生徒を把握しやすくなり、的確な声かけや意見の関連付け等につなげることができます。

教師の活用

つかむ	○さんと□さんがつまずいているな。
みとおす	○さんの考えを生かせるように、 □さんの考えとつなげよう。
そろえる	理解の差が大きいな。全体で改めて説明しよう。

2 共有・創造

多様な意見や考えを手軽に共有できるため、自分の考えを深め、新たなものを生み出そうという創造的な思考・学びにつながります。

また、共通点や相違点が共有しやすくなり、児童生徒の対話を促すことができます。

教師・児童生徒の活用

くばる あつめる	～について、みんなはどう考えているのかな。
くらべる	○さんと□さんのちがいをくらべてみよう。
くわえる	○さんの考えに付け加えたら、もっとよくなりそう。
まとめる	みんなの意見をまとめてグラフにして伝えたいな。

3 試行錯誤

これまで確認しづらかった思考の過程や自分の身体の動き等が可視化されることで、児童生徒は即時的なフィードバックを得ることができ、考えや動き等を確認、修正しながら主体的に学びを深めることができます。

児童生徒の活用

たしかめる	○○すれば、～になるのかな。
みつける	思い通りに動かないな。どこがちがうのかな。
ためす	色々試して、イメージしたものに近づけよう。

児童生徒がICTの有用性を実感し、
児童生徒自身がICTを「学びのツール」の一つとして活用できるように、
教師はキャッチ＆レスポンスしたい3場面をおさえ、活用をすすめる。

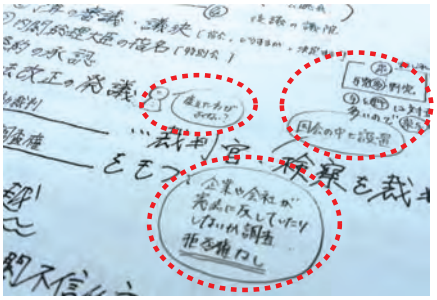
リーディングスキルテストの視点に基づく授業改善2
～ＲＳＴの成績がよかった生徒へのインタビューからの考察～

児童生徒が受検したRSTの結果から、**特に成績がよかった生徒**（中学2，3年生合計16名）を対象にインタビューを行った。以下は、生徒へのインタビュー内容（Q1～3）を考察し、日々の指導の参考になるポイントをまとめたものである。

RSTの成績がよかった生徒16人に聞きました!!

【Q1】 授業で使っているノートを見せてください。

【A1】 教師が板書した内容等に加え、授業中、自らの判断で、**気付いたことや大切だと思ったこと**をノートに記していた。
（右のノートのように、吹き出しや枠囲みを使って、記述している）



社会科のノート（中学校第３学年）

指導のPoint
①問題文や本時の目標等、生徒に視写させる際は、**これから何を書くか、事前に話して**から板書し、**教師と共に正しく書き終える**ようにする。
全員の聞く姿勢ができてから、指示や説明をする。
②ノート指導では、板書を視写するだけでなく、自分が**どのように考えたのか、疑問に思ったこと、気付いたこと、もっと追求してみたいこと**等も記述するよう指導する。

【Q2】 読書は好きでしたか。（また、いつ頃から好きになりましたか）

【A2】 大好き（全員）
★**好きになった理由**…家族による読み聞かせ、学校・図書館での読み聞かせ、周りに本がたくさんあったこと
★**好きになった時期**…就学前～小学校低学年頃
★**よく読んでいた本**…小学校３，４年で、ハリーポッターシリーズやマジックツリーハウスシリーズ。
低学年の頃から、○○図鑑を眺めるのが好きだった。

指導のPoint
①活字に慣れるため、**日頃から読む活動を大切に**するよう指導する。
②**様々な分野に興味・関心をもつ（新しい知識に触れる機会をつくる）**ようにする。また「疑問に思ったこと」「知らない言葉」等は**すぐに調べる**よう指導していく。

【Q3】 自分で決断することと、周りの人が決断してくれることではどちらが多いですか。

【A3】 部活動決め、習い事（塾も含む）を始めるかどうか等、親や教師、友達に相談をするが、最終的には自分の考えを尊重してもらい決断している。（全員）

指導のPoint
生徒自身が判断・決断する場面を多く作ること、**生徒の考えを尊重する周りのサポート**が自主性を育てている。
授業においても同様に、**子供たちが自由に考えたり、判断したりする場面を設定**することが重要である。

ＲＳが高い生徒が分かりやすいと感じる授業とは？ ～生徒のインタビューより～

- 私たちが、**つまずきそうな所**は特に詳しく説明してくれます。また**子供たち（聞き手）の受け取り方**を考えて、話してくれます。 **（授業のUD化）**
- 言葉だけでの説明ではなく、**絵、図、具体物等**を使った授業が多いです。 **（可視化）（イメージ化）**
- 何をすれば（考える・発言する・作業する等）よいのか、**分かりやすい指示**を出してくれます。 **（焦点化）**
- 用語の意味は丁寧に説明してくれます。生徒が間違えたときは、正しい用語の意味（定義）に**振り返って**それをもとに考えるよう教えてくれます。 **（言語化）**

日々の授業をRST６つの問題タイプの視点から改善していくことが大切（※）

詳細は以下の資料をご参照ください。

過去の関連資料

H31 ＲＳＴの視点に基づく授業改善

多層指導 ＭＩＭを用いた指導

H30研究集録 ＲＳ向上を目指した共同研究

すべての児童生徒が過ごしやすい学級づくりのために

ー学級雰囲気が良好なクラスー

- チャイムが鳴る前に、担任も児童生徒も授業の準備ができている。
- 授業内におけるノートの取り方などのルールが確立されている。
- 指示が明確である。
- 教室の整理整頓ができている。
- 話し合いが活発だが、メリハリがあるため騒がしくない。

ー学級雰囲気が良好でないクラスー

- チャイムが鳴っても授業が始まらない。
- ノートの取り方の具体的な指示やルールがない。
- 指示が次々に追加され、途中で何をするかがわからなくなる。
- 机がまっすぐ揃っていない。
- 誰かの失敗や話し方に対して、他の児童生徒が過剰に反応をする。

良好な学級雰囲気のための2つのポイント

Point 1 学習環境を整える

①教室の環境調整、②指示の明確化を行い、児童生徒が落ち着いて学習に取り組めるように環境を整える。
ルールを定着させるためには、できていない児童生徒ばかりに目を向けるのではなく、**できている児童生徒に対して、教師が褒める、認める**などの適切な評価をすることで、学級全体に波及させる。
【チェックリスト　1～8】

Point 2 他者を尊重する雰囲気づくり

学習環境を整えた上で、児童生徒の様子を確認しつつ**肯定的な声かけをする**など、良好な関係性を構築し、他者を尊重する雰囲気を醸成する。
【チェックリスト　9～13】

学級の雰囲気チェックリスト

筑波大学　柘植雅義・岡部帆南

番号	場面	内容
■ 1	授業開始前	教室の整理整頓（本棚・ロッカー・児童生徒と先生の机など）ができている。
■ 2		机が真っ直ぐ揃っており、床に荷物やゴミが落ちていない。
■ 3		チャイムがなる前に、児童生徒も先生も授業の準備ができている。
■ 4	学級経営・授業運営	クラスのルールやマナー、授業内における発表の仕方、ノートの取り方などが確立されている。
■ 5		授業の進め方や本時の内容が明確である。
■ 6		授業内における話し合い活動や意見交換が活発である。ただし、メリハリがあるため、騒がしくない。
■ 7		課題が早く終わった児童生徒や時間を持て余している児童生徒、私語をしている児童生徒に対して、次の指示を出している。
■ 8		必要に応じて、板書に振り仮名を付けたり、ページ番号を書くなどの工夫をしている。
■ 9	児童生徒と先生のやりとり	児童生徒が自分の意見や感想をノートに書いているタイミングで、先生自身の仕事や作業を行わず、児童生徒の表情や姿勢を確認している。
■10		「いいね！」「そうそう！」「ＯＫ！」などの肯定的な言葉掛けをしている。
■11		児童生徒と担任の先生の授業内におけるやり取りが多く、テンポが良い。
■12	児童生徒同士のやりとり	物を落としてしまったり、作業についていけなかったりする友人のことを気に掛け、すばやく行動に移すことができる児童生徒が多い。
■13		誰かのふざけや失敗に対して、過剰に反応する児童生徒が少ない。

雰囲気づくり × セサミストリート・カリキュラム ＝ 多様性を認める学級づくり

セサミストリート・カリキュラムは、「キャリアとお金」「価値や多様性の理解」「インクルージョンの実現」の３つの軸を中心に構成され、教科における学力の向上だけでなく、社会性や情緒的行動、生涯学習における基礎的な資質の育成を目標としている。各学年１２のプログラムから学級や学校の実態・ニーズに合わせ、必要なプログラムを選択することができる。

セサミストリート・カリキュラムの４ヶ条

1 間違いも正解もない。
2 思ったこと、考えたことは全て発言する。
3 お互いを尊重し、受け入れ合う。
4 途中で考えが変わってもよい。

C)2019 Sesame workshop. All reserved.

セサミ×特別支援

単元名：立場の理解　（4学年）
課　題：相手の立場にたった関わり方を考えよう。
〈展　開〉
- 街にはどんな人がいるのかを考える。
- 特別支援学級について知る。
- 見た目だけでは「困っていること」がわからない人がいることを知るとともに、接し方を考える。
- 考えたことをグループ、クラスで共有する。

セサミ×国際理解

単元名：文化の違い　（4学年）
課　題：いろいろな文化や価値観を知り、尊重の仕方を考えよう。
〈展　開〉
- 自分が出合った文化や価値観の違いをワークシートに書く。
- ゲストティーチャーから他国と日本の生活様式や風習の違いなどについて紹介してもらう。
- 自分が出合った文化や価値観の違いをクラスで共有する。
- 自分と違う文化や価値観と出合ったときにどうするかをグループ、クラスで話し合う。

セサミストリート・カリキュラムは、児童生徒一人一人の違いを認め合い、それぞれの持ち味を発揮できる学級＝多様性を認める学級をつくるための手立ての一つとなります。

C)2019 Sesame workshop. All reserved.

児童生徒の「気になる行動」へのアプローチ

STEP1 「気になる行動」を3つの場面に分割し、観察しましょう

行動の前

③ 行動のきっかけ、状況を観察しましょう

例えば…
- 何の科目だったか
- どんな声かけだったか
- 周囲の状況は（誰と、いつ）

行動

① どのような行動か、具体的にとらえましょう

例えば… △癇癪をおこす
△やる気がない
○大声で泣く
○板書をしない

△：具体的でない　○：具体的な行動

行動の後

② 行動の後に何が起きたか観察しましょう

例えば…
- 先生から注意をされた（注目）
- やりたいことをやった、ほしいものを得た（要求実現）
- やりたくないことをやらなかった、いやなことを避けた（回避）

どのような行動が、どういうきっかけで起こり、どんな結果になったか観察できたら、

STEP2 行動の前後にアプローチし、「望ましい行動」を増やすための工夫をしましょう

行動の前にアプローチして、望ましい行動を増やすには…

- 望ましい行動がしやすくなるように**環境を整える**
- 何をしたら良いかがわかるように、**具体的に指示を出す**　など

行動の後にアプローチして、望ましい行動を増やすには…

- 望ましい行動に近づいたときに、**褒める・認める**など肯定的な関わりをする

（**行動のすぐ後**に肯定的な関わりをすることが効果的）

例1：国語の授業で落ち着かないAさん

先生から漢字プリントが配られる → 自分の席に座らず、教室内を歩き回る → 離席して漢字プリントをやらなかった（先生から座るよう指示される）

観察③行動の状況は？
漢字プリントのレベルがAさんには難しすぎたのかな

観察①どのような行動？
単に落ち着かない、ではなく具体的な行動で観察しよう

観察②結果どうなった？
離席すると漢字プリントをやらなくて済む（回避できる）と学習しているのかな

アプローチ①行動の前
本人の実態に合わせた教材で、学びに向かいやすくなるようにしよう

行動の強化

アプローチ②行動の後
小さなプラスの変化を見逃さず、肯定的な声かけをしよう

先生から本人のレベルにあった漢字プリントが配られる → 自分の席で漢字プリントに取り組む → 「漢字練習取り組めているね」「頑張っているね」など、肯定的な声かけ

例2：切り替えが苦手なBさん

図工の授業で先生に片づけをするよう言われる → 大声で「いやだ」と泣き、工作を続ける → 休み時間まで延長して工作を続けることができた

観察③行動の状況は？
まだ片づけしたくなかったのかな

観察①どのような行動？
「切り替えが苦手」と感じた行動を具体的にとらえよう

観察②結果どうなった？
泣くとやりたい工作が続けられる（要求実現）と学習しているのかな

アプローチ①行動の前
本人が見通しを持って学習できるように事前の工夫をしよう

すぐに望ましい行動にすることが難しい場合
【まだやりたいと先生に言う】など、ハードルを下げた代わりの行動から始めよう

授業の最初に「○時に片づけ始めるよ」と伝えたり、授業の予定を視覚化したりする → 時間どおり片づけを始める → 「時間どおり片づけられたね」など、肯定的な声かけ、片づけポイントがたまって視覚的に達成感が感じられる　など

※応用行動分析学を参考にしています。詳しく知りたい方は、応用行動分析学に関わる書籍等を御参照ください。